

電話会議開催日：2021年2月8日

2021年3月期 第3四半期連結決算電話会議 質疑応答

【質問者1】

Q：今回2月公表予想の利益の出方について、海外銅鉱山は12月決算なので市況がある程度予想に織り込まれていると思っていたが、感応度以上に増益しているように感じる。来年度の税引前利益の目線としては、仮に市況が変わらないという乱暴な前提に立つと、4Q実績から貸倒引当金戻入益+91億円を除いたレベルの4倍程度と見て良いか。それとも他に何か特殊要因があるのか。また、4QとQの比較評価を教えてください。

A：4Q自体には銅価格上昇の影響が各海外銅鉱山ともかなり織り込まれている。一方で、菱刈は年産6トン計画のところ3Qまでの実績で5トンと、通常4.5トンである生産量の進捗率を大幅に上回っており、4Qの利益ははやや少なめに計上されている要因もある。

4Q利益の絶対値については、前述の菱刈の影響を除くと、海外銅鉱山はおおむね生産数量を反映し価格差を享受している数字だと思う。3Qと4Qの差については、資源セグメントの売上総利益3Qが217億円で4Qが157億円と約60億円減益方向となるのは、ほとんどが3Qと4Qの菱刈鉱山の実産量の差によるもの。セグメント利益（税引前利益）についても、3Qは223億円、4Qでは293億円と70億円ほど好転しているが、持分法適用の海外銅鉱山における銅価格上昇による増益要因が含まれている。

Q：資源セグメント利益の中に、シエラゴルダへの貸倒引当金戻入額は入っているか？

A：入っている。

Q：貸倒引当金戻入の91億円は除いたとしても、4Q予想に菱刈の実産数量差分のマイナスが含まれていることも考えると、四半期で300億円くらいの実力損益（税引前利益）があっても、仮に市況がこのまま維持されれば、原油価格などのコスト悪化要因が出てくる可能性もあるものの、年間ではこの4倍くらいはやってやれないことはないと考えても良いものか。

A：概ねそのようなご理解でよろしいかと思う。

【質問者2】

Q：材料セグメント税引前利益について、11月公表予想比で+40億円と増益している背景を教えてください。売上も+40億円の増収なので、増収と増益の関係も含めて教えてください。

A：11月時点での見込みに比べると、自動車関連市場の回復基調が鮮明になってきている。また、機能性材料の製品群でも、スマホ関連市場が回復基調であることが増収増益方向で材料セグメント予想を見直した背景。

Q：補足説明資料5ページにある、2月公表予想 vs 11月公表予想比較における製錬の銅系・ニッケル系のその他の増益要因で何か大きなものがあれば教えてください。

A：製錬の銅系その他の中には、パラジウムや硫酸などの副産品の収入のプラスが含まれている。Ni系は細かな要因の積み上げ。

Q：為替感応度が上がっているのはなぜか。海外の利益が増えているからか。

A：ドルベースの利益額がボディになるので、金属価格の上昇を受けてドルベースの利益額が大きくなったことで、為替感応度が増えている。

【質問者3】

Q：製錬セグメントの税引前利益が3Qから4Qにかけて減益している要因を教えてください。

A：製錬セグメントは売上総利益では3Qの163億円から4Qでは130億円と33億円の減益方向。その理由の一つは銅系では菱刈鉱山の鉱石を東予工場で受け入れて金に加工していくが、金価格が高かった上期に受け入れた鉱石を、3Q、4Qの前提価格で評価して出荷していくため、金の建値差によるマイナスが入っている。もう一つはニッケルでの価格精算的なものになるが、フィリピンからミックスサルファイド（MS）と呼ばれる中間原料をニッケル工場で受け入れメタル製品に加工していく流れの中で、適用価格の見込み上で差が生じているという要因。セグメント利益（税引前利益）では、3Qが177億円、4Qが103億円と、さらに差が開いているが、ここは所謂原価的なものではなく、デリバティブ評価系の損益影響といった特殊要因が3Qに含まれているため。

Q：CBNCおよびTHPALが前回予想比で減産する背景と、来期に向けた生産量安定に関する展望を教えてください。

A：CBNCの前回11月公表予想比での減産は、鉱石中のニッケル品位の低下によるもので、操業そのものに特段の問題は無い。THPALは大雨の影響で水分量など鉱石の性状に変化があったことが主要因で、こちらも操業で設備トラブル等があった訳ではない。これらの特殊要因が無ければ生産量は戻ってくると思うが、来期の生産量計画はこれからという段階であり、現時点では具体的にお示しできる数量は無い。

Q：製錬事業のデリバティブ評価損益は一過性の特殊なものか。

A：ご理解のとおり、一過性の特殊なもの。

【質問者4】

Q：材料セグメントの利益が2Qから3Qにかけては増益で、3Qから4Qの減益となっている要因について教えてください。

A：2Qから3Qの増益については、主に自動車・スマホ関連市場の回復による。3Qから4Qの減益については、売上総利益ではニッケルペーストなどの粉体材料での原料に適用される金属価格の影響が要因の一つとして挙げられる。また、税引前利益では材料関連の持分法適用会社の利益の動きもあって4Qがやや減益となっている。

Q：電池材料の拡販に向けて動いていると思うが、何か進捗があれば教えてください。

A：昨年公表したNCA月産4,550tから4,850tへの増強決定以降では、現時点で具体的にお話しできるアップデートは無い。

Q：電池材料の3Qおよび4Qの稼働率についても開示できる情報があれば教えてください。

A：フル生産に戻ってきつつあるが、半導体不足による自動車市場への減産影響を含め状況を注視しているところ。

Q：半導体などの懸念材料は注視しなければならないが、3Qおよび4Qの生産レベルはかなり回復すると見ている。

【質問者 5】

Q : THPAL の生産量は Q 別に見ると今期も大きなブレがある。年間換算では 36kt レベルに近い生産量になっている時期もあるようだが、仮に鉱石性状、天候、設備トラブル等で何もしなければ 36kt レベルの実力があると見てよいか。

A : まず、今年度の 1Q は、コロナ影響による休転期間の長期化というのがあった。また通常 9 月に実施している休転が 10 月にずれ込み、その次の 3 月に予定していた休転を 4 月以降での実施を検討している等、今年度は定期休転期間の変更があった。それも含めて各 Q で増減が発生するような形になった。以前あった設備トラブルについても予防保全も含めた対策により改善してきており、特殊要因が無ければ、デザインキャパシティに近いレベルでの生産量を目指していることには変わらない。もともと 2020 年度には 33kt の生産を予定していたので、先ほど説明した特殊要因を含め、やや減産というのが足元の状況。

Q : Cote で高品位鉱脈発見のプレスリリースがあったが、既に発表済のプランに与える影響があれば、公表した背景も含めて教えてほしい。

A : 1/22 のプレスリリースは、Cote プロジェクト周辺のメインの鉱床から少し離れた別の鉱床での探鉱結果の経過公表となる。比較的高品位な鉱脈を捕捉して良好な結果であったため公表させていただいたが、あくまでもメインの鉱床とは別の周辺鉱床の探鉱結果の経過公表であり、今後の探鉱や確認試錐を経て採掘処理可能な鉱石量などを確認していく形となるので、可採鉱量や生産量など Cote プロジェクトの計画に現時点では変更は無い。

以上